
1

しゃヴえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1

【コード】

N23570

【作者名】

しゃヴえ

【あらすじ】

「私」が妙な女に出会い、表現の世界に翻弄される話。

1 (前書き)

書ける時に書きます。

誤字があつたので訂正しました。

私が街で買い物を買って済ませ、さて帰ろうと、人ごみの中、埋もれながら歩いていたら時だ。

人の流れに身を任せ、進み、ああこんな寒い日はシチューを作ろうと考え、食料店に向かおうと考えた時のこと。

目の前が急に開けた。

何事かと目を上げると女がいた。

こんなところで立ち止まって、妙な女だ。そう思ってもう一度見ると、やはり妙だ。

これは怖いと思って、ゆっくり横を抜けようとする、澄んだ声が耳に入った。

赤いのか、青いのか。夢か真かうつつの世。

その言葉を聞いた瞬間、全身がしびれるような感覚に襲われ、歩みを止めてしまった。

音も聞こえず、動くものすべてが止まっているように思えた。時間が止まるとはこの事だ。

しまった、と思って女を見るとやはりこちらを見ている。

これはまずいと思い、人の流れの中に逃げ込もうと考えたが、収まる隙間が見当たらない。

もう一度女を見る。

女は静かに笑っている。背筋が凍ってしまうほどの微笑み。そして先ほどの言葉をもう一度繰り返す。

「赤いのか、青いのか。夢か真かうつつの世。ここに立つ私は本当に存在するの？そこに居るあなたは本当に存在するの？誰にもわからないことだからと決め付けて、考えないのは愚か者」

今度は少女のように微笑む。

「言葉は、文字は、表現できる全ての物は呪術となりうる。表現とは呪いのようなものじゃない？」

女はそついい終わると、霧が晴れたように女は目の前から消えた。
いつの間にか、私の手には本が握られていた。

あの女が何者だったのかを今や知るすべは無い。

手に持つ本をじつと見た。

簡素な装飾のみだけで、題の類は見当たらない。

得体の知れないこの本を、捨ててしまえと思ったが、中身が気になりカバンにしまう。

これは大変妙な事だと思いながら私は歩き始めた。

ぼんやりと頭の中でコダマする、女が言ったあの言葉。

赤いのか青いのか。夢か真かうつつの世。

世界が赤いか青いかなどと考えなくても答えは出ている。

答えは誰もが知っている通りだ。考えるまでもない。

考えないのは愚か者。

ハツとして周りを見た。誰もいない。街灯がぼつんぼつんとあるだけの寂れた道に私だけ。

じつとりと誰かに見られている気が起きたが、やはり誰もいない。何処かに女が潜んでいるのか？ それとも別の誰かか？

気のせいだ。今も視線を感じるが、気のせいだ。

笑ってだそうとする足を、しっかりしろと必死に抑え、一歩、一歩。

ああ駄目だ！ 駄目だ駄目だ！！ あああああああ！！

狂ってしまったと考えながら、あああと叫んで走っていた。

叫んで走って家に着いた頃、私の喉が壊れたことに気づいた。

ピユウ。ピユウと鳴る喉が何故か分らず可笑しく思い、可笑しく思っ

て笑うとピユウピユウなる。笑えば笑うほどピユウピユウピユウと鳴って、私は笑いまたピユウと鳴る。

大変可笑しい。可笑しくて可笑しくて、また叫んでしまった。ピユウと叫び終わって、とうとう私は狂ったのだなと思った。

寝て忘れようと、風呂にも入らず布団に入る。
まどろみの中、本は明日読もうと決めた。

1 2 0 3 (留 書 札)

1 の 中 の 3 番 目

朝の日が差し込む部屋の真ん中で、床にどかりと座って本を読むことにした。

最初はたわいのない日記に過ぎなかったが、読み続けるにつれて、ずれていく様な感覚がした。

何がずれ始めたのか分からないまま、異様な感覚は加速していく。考えても考えても追いつかず、そればかりか距離をどんどん離されていくばかり。

何故私はこれを読んでいるのだ？ そのことで頭がいっぱいになり、読む苦痛を耐え続けた。

壊れた喉が鳴っているのに気づき、ハツとした。

危うくまた壊されるところだった。

これがあるのままに起きたことだと考えるのを止めにして、再び文字を追った。

日ごとに雰囲気が変わり、持ち主がどのような人物か定まらない。めまいを感じながらも読み続けたが、私はついていくことが出来ず、読み終えた。

最初のページに戻り、ズレが起き始めたであろう文を探して読み直す。

……私の中で謎の言葉を呟き消えた女。女は何者なのか？ 言葉の意味は？ その答えが判明した時、世界は姿を変えた。これは表現の世界に翻弄される私の物語。

ちょっと待て、この日記は誰が書いたのだ？

1103 (後書き)

つぎの話で「1」は終わりです。

1 n o 4 (前書き)

「1」の終わりの話。

夜、私は日記を手に持ち、街へと向かった。あの女にこれを書いていたのかを聞く為に。

家を出てから、暗い道を、私は足音と壊れた喉を聴きながら歩き続ける。

いつも行く食料店が目に入り、街に着いたのだと気づいた。だが、何かがおかしい。嫌に静かで、耳が痛くなるほどだ。

嫌な予感に焦りが募る。私は女を捜した。

街を走り抜けると、赤でも青でもないこの世界にいた。夢とも現実ともとれぬ世界に。

様々な色の絵の具をぶちまけた様な世界をに立ち、私はこの世界に生まれた時のことを思い出した。

この日記帳に書かれたメモに過ぎないこの私に舞台が与えられた頃の事だ。

私は「私」という名を与えられ、あの女と初めて顔をあわせた。

女は私に様々なものを用意してくれた。

巨大な樹木がポツンとあるだけの草原や火の山。石造りの街。魔物の住む世界。はたまた車が空を飛ぶ世界。

それらのものが書き溜められていく日記帳の中で、私は遊んでいた。

女は私の遊ぶ姿を見て、うれしそうに微笑んでいるを覚えている。

そのうち、設定や舞台が修正され、まると、女はお話を作ろうと私に言った。

その物語に私は立ち、動き出した世界の風の音や太陽の暖かさを全身で感じ、これから待ち受けるであろう出会いや困難に胸を躍らせた。

物語は順調に書かれていた。しかしある時大きく止まった。

たびたびそのようなことはあったが、ちゃんと続きを書いてくれ

た。

いつもより休憩が長くなっただけだとそう思い、私は待った。永い間、書かれるのを待っていた。

だが、そのまま続きを書かれることはなかった。

私は未完の物語に放り出されたまま忘れられたのだ。そう感じて、しようがないことなのだと言いに聞かせた。

なのに……

なのに何故あの女はまた書こうだなんて思ったんだ!!

そうだよ。俺はただの登場人物に過ぎない。設定に沿って動かない操り人形でしかないよ。

けどな、いきなり現れてまた書きますって都合が良すぎるだろうが。

ふざけるな。書くな。書くな。書くな!!

これ以上私の物語をおかしくしないでくれ!!

「ごめんなさい」

女が目の前に立っているのに気づいた。

「好き勝手に書きやがって。俺の物語を壊してどうするつもりだったのだよ!!」

俺は設定を無視して声を出した。女は「ごめんなさい」と言っつつむき黙り込む。

喋れよ。お前の言葉を書けよ。お前は何でまた書こうだなんて思っただんだよ?

女は俺の反抗に戸惑っているようだ。

「何故私にまた書き始めたのか分からない。書くことが出来るかどうか不安だった。実際、無理やり文を繋げていただけで、楽しいとは思えなかった。今、貴方が出てくるまでは」

俺は次は書くのかと聞いた。女は分からないと答える。

煮え切らない奴だ。しかし……

この世界を見ていて、俺はすこし遊んでみるかと思った。

1 n o 4 (後書き)

色々な意味で「私」の物語は続きますよ〜みたいな感じを残しつつ、
これで「1」は終わります。

自分の書く文の未熟さに泣きそうになるのを乗り越してもはや失笑w
ダメ出しも含め、感想を頂けると幸いです……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2357o/>

1

2010年10月14日13時49分発行